

ミッション系女学校におけるピアノの様々な役割
—三木楽器並びにヴォーリス建築のプール学院の史料をもとに—

齊藤紀子*

Pianoforte Roles in Christian Girl's (High) Schools:
On the Analysis of the Account Books (1902-1940) of Miki-Gakki Company and
the History of Poole Gakuin Rebuilt by W. M. Vories

SAITO Noriko

Abstract

The purpose of this study is to show how the pianofortes played variety roles in the girl's (high) schools in the first half of the 20th century in Japan.

Miki-Gakki that was one of the most important music dealers, supplied 649 pianofortes for the schools, especially girl's schools from 1902 to 1940. The previous studies about the uses on the girl's schools generally focused on the musical lessons and concerts. On one hand in this paper I treated of school events and extracurricular activities. For example in Poole Gakuin the pianofortes used for not only music educations and musical school events, extracurricular piano lessons but also school events and charity works, moreover rebuilding the school by W. M. Vories who could play the piano. And learning achievement showed at Osaka City Central Public Hall and Osaka Broadcasting Stations and so on. It was Miki-Gakki in the background played the important role.

In a sense, like Poole Gakuin the girl's school which were not the academy of music supported the diffusion western music in Japan. It is the assignment which I should work on hereafter that I bring the depth to research about the lifelong learning of western music in Japan.

Keywords : pianoforte, girl's (high) school, Miki-Gakki Company, Poole Gakuin, W. M. Vories

1. 本論文の目的

ピアノ (pianoforte) は、学校教育で用いられる種々の楽器のなかでも特別な位置づけにある。義務教育においてピアノの奏法を習得する場面はないが、小学校をはじめ様々な教育機関の講堂や音楽室にこの楽器が備えられている。ピアノの稽古に通ったことがなくとも、どのように音を出すのか、そして、どのような音が鳴るのか、わからないこどもはいないだろう。広く知られている楽器の1つであるが、ピアノは重くて大きく、学習机や椅子といった他の学用品と比べて高価な備品である。洋楽導入初期ともいえる明治時代には、学校にピアノが納入されるということは雑誌や新聞で報じるに値することであり¹、ピアノが寄贈されることもあった²。20世紀初頭の日本では、教育機関にピアノが備えられているか否かということが、地域の教育水準を測る1つの指標であったといっても過言ではない。

本論文の目的は、ミッション系女学校の様々な場面でピアノが使用され、その成果が学内外で公表されること

キーワード：ピアノ、(高等)女学校、三木楽器、プール学院、W. M. ヴォーリス

*平成26年度 比較社会文化学専攻修了 グローバルリーダーシップ研究所 特別研究員 (みがかずば研究員)

により、ある意味でピアノの普及に役立っていたことを具体的に明らかにし、ピアノを所有していなかった人・弾かなかった人への広まりをも含め、女学校を通してみえてくる日本のピアノの普及状況の一端を示すことにある。まず、第2章で、20世紀前半の日本の女学校へのピアノの納入状況を、三木楽器のデータ（齊藤 2015）をもとに示す。三木楽器のデータは、ピアノを供給する側から楽器の普及状況を表す貴重な史料の1つである。本稿の中核をなす第3章では、こうした数値データからは見えてこないピアノ1台の後ろにある人々の動向にも目を向け、大阪の普溜女学校（1890、現プール学院）の学校史史料をもとに、女学校におけるピアノの様々な使用例を示していく。

20世紀前半の日本の教育機関へのピアノの納入状況や女学校における演奏実践に関する既往研究は、これまでも数多く積み重ねられてきている。武石（2009）は、明治初期の公立学校へのピアノの導入状況について分析した。そして、幼児教育、体操教育、音楽教育の三段階で導入されていることから、音楽取調掛におけるピアノの設置が出发点ではなく、その最終段階に位置されることを明らかにしている（武石 2009：18）。市川（1995）は、明治期の教育現場へのピアノの導入について、音楽雑誌などをもとにオルガンとの違いを浮き彫りにし、オルガンが唱歌教育の必要性から導入されたのに対し、ピアノは西洋音楽の演奏実践のために女学校を中心に導入され、次いで師範学校に普及していったことを指摘している（市川 1995：30）。

本稿に最も関連する先行研究は、仙台と広島を事例にプロテスタント系女学校によるピアノ界への貢献について述べた坂本（1998）である。坂本によれば、旧制高校などに在籍する「近代日本の若きエリート」がプロテスタント系女学校に赴任したアメリカ女性宣教師のピアノに興味を示し、「日本人側にピアノを引き寄せた」（坂本 1998：40）。市川、坂本の研究成果からは、日本でピアノが普及するうえで、女学校も主要な役割を果たしたことがみえてくる。

こうしたピアノの需要者側の視点に立脚した既往研究に対し、時期・地域共に広がりを持ったピアノの供給者側のデータに即して20世紀前半の日本のピアノの普及状況を明らかにし得るのが三木楽器の『ピアノ納入簿』である（齊藤 2015）。

2. 三木楽器の『ピアノ納入簿』（1902-1940）にみる戦前の日本の女学校とピアノ

本章では、20世紀前半の日本の女学校へのピアノの納入状況を、三木楽器の『ピアノ納入簿』（1902-1940）の数値データをもとに示す。三木楽器は江戸時代に書肆河内屋佐助（三木佐助）として創業した³。1887年に文部省編集局直轄甲乙部図書関西取扱所の開設に伴いその所員に就任した四代目三木佐助は、翌年から風琴（オルガン）の販売に着手し、1890年には東京音楽学校の卒業生を招いて大阪近隣の府県の教育従事者を対象に音楽講習会を開催している。書籍業時代に築かれた旧文部省との関係が、教科用図書の販売ルートをいかした確固たるピアノの販売網の確保につながったと考えられる。

『ピアノ納入簿』は、三木楽器が本社（大阪市中央区）に所蔵するピアノの納入について記録された二冊の帳簿の総称である。一冊は、1902年から1928年までの記録で、日本で製造されたピアノ2624台（1903-1928）の納入について記載された前半部分と海外で製造されたピアノ741台（1902-1924）について記載された後半部分に分けられる。もう一冊は、海外で製造されたピアノの納入を中心とした1918年から1940年までの335台の記録である。二冊の帳簿を合わせると3700台のピアノの販売について記録されていることになるが、全データを時系列に沿って並べかえると、重複している記載や購入を取り消された事例もあり、実際には、3676台のピアノが消費者のもとに納入されたことになる。本稿では、記載事項の重複や記録されている時期の重なりを考慮し、この二冊の帳簿を合わせたデータを『ピアノ納入簿』とする。この帳簿に記載された項目には、二冊の間で若干の差異がある。国産ピアノと輸入ピアノの二つの部分に分けて記載された一冊目には、「発送日付」、「種別型番号」、「売渡金額（楽器代價、荷造費）」、「宛名」、「住所」、「摘要」が、輸入ピアノを中心に記載されたもう一冊目には、「傳票日付」、「納入先（住所）」、「摘要」、「取次店名」が記録された。筆跡から、この帳簿の記録には複数の人物が関与したと考えられ、また、各項目の記入欄は必ずしもすべてが埋められているわけではない。たとえば、取引回数の多い納入先や三木楽器の近辺への納入の中には、住所が略記・省略されていることもある。『ピアノ納入簿』については、『大阪音楽文化史資料（明治・大正編）』（大阪音楽大学音楽文化研究所（編）1968：130-131 頁間の折込部）に三

木楽器が作成した表（手稿）の写しが掲載され、それをもとに増井が「大阪三木楽器店の戦前のピアノ販売実績」として分析している（増井 1980：22-23）。しかし、その詳細なデータの分析は齊藤（2015）まで顧みられることはなく、三木楽器が所蔵する原簿にあたったところ、その数値には誤差が生じていることがわかった。

『ピアノ納入簿』のデータには、最終的にどのような場所に納入されたのか判明しない取次商を介した事例（1768台）が約半数含まれている。購入者への直接販売のみならず、こうした取次商を経由するピアノの納入を行っていたことは、三木楽器のピアノの販売の一つの大きな特徴であり、取次を担う商店の存在が三木楽器に対するピアノの一定の需要の確保に大きく寄与していた。そうしたケースを除き、最終的な納入先を特定できる事例のなかでは、約3割のピアノ（649台）が教育機関に納入された⁴。そして、『ピアノ納入簿』に最初に記録されたのは、教育機関への納入事例であった。1902年に、岡山県立高等女学校にアメリカで製造されたアップライトピアノが400円で納入されている。

表1に『ピアノ納入簿』にみる教育機関への納入について、学校種ごとの内訳を示す。学校数は教育機関の種類によって異なるため、ピアノの納入台数の多少を表1の数値のみで比較することは控えるが、小学校や（高等）女学校、師範学校など唱歌や器楽が教育課程に組み込まれている学校種への納入事例が顕著にみられる。「その他」には、感化院や聾口語学校、陸軍学校などへの納入を計上している。紙面の都合上、詳細な情報を示さないが、関西圏を中心に日本国内各地の学校にピアノが納入されていた（齊藤 2015：33-38；資料）。三木楽器の『ピアノ納入簿』にみる教育機関への納入事例は、20世紀前半の日本において教育現場に納入されたピアノを通して西洋音楽が普及していたことの1つの証であるといえよう。

表1 『ピアノ納入簿』にみる教育機関への納入事例の内訳

学校種	台数
幼稚園	28
小学校	318
中学校	11
（高等）女学校	190
その他の高等学校	6
師範学校	58
音楽学校	29
その他	7
不明	2

（高等）女学校への納入では、西日本の各府県主要都市を中心とする（高等）女学校への納入がみられた。また、大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国（2台）や台湾（3台）への納入も確認できた。表2に、本稿と関連の深い近畿地方への納入事例を示す⁵。

網掛けをして示した学校は、私立の教育機関である。三木楽器がピアノを納入した女学校ならびに高等女学校の多くは国公立の学校であったが、大阪府や兵庫県を中心に私立学校にもピアノを納めていた。（高等）女学校では、器楽としてオルガン（風琴）やピアノの奏法を習得する教育課程が組まれていた。坂本麻実子によれば、明治時代には、多くの高等女学校が国家の祝日（紀元節、天長節、地久節など）や学校の記念日に音楽会を行い、「高等女学校の音楽教育は、近代日本のピアノ界に女学生というアマチュア集団を形成する」のに一役買っていた（坂本 2001: 38）。

本稿では、私立の女学校のうち、三木楽器本社の所在地でもある大阪のプール学院に焦点をあててピアノの具体的な使用例を同校の学校史史料をもとにみていく。

表2 『ピアノ納入簿』にみる近畿地方の(高等)女学校への納入

所在地	学校名
三重県	上野実科女学校
滋賀県	大津市立実科女学校、長浜女学校(現県立長浜北高等学校)、彦根高等女学校(現県立彦根西高等学校)、日野女学校(現県立日野高等学校)、水口高等女学校(現県立水口高等学校)
京都府	加佐郡立高等女学校(現府立西舞鶴高等学校)、京都市立高等女学校・堀川高等女学校(現京都市立堀川高等学校)、府立第一高等女学校(現府立鴨沂高等学校)、府立第二高等女学校(現府立朱雀高等学校)
大阪府	阿倍野女学校(現府立阿倍野高等学校)、生野高等女学校(現府立勝山高等学校)、泉尾高等女学校(現府立泉尾高等学校)、市岡高等女学校・江戸堀高等女学校(現府立港高等学校)、梅田高等女学校・堂島高等女学校(現府立大手前高等学校)、大阪女学校(現大阪女学院)、北区実科(高等)女学校(現大阪市立桜宮高等学校)、北野実條女学校、金蘭会(高等)女学校(現金蘭会高等学校)、河南高等女学校(現府立河南高等学校)、堺高等女学校(現府立泉陽高等学校)、堺市立高等女学校・堺実科女学校(現府立堺西高等学校)、実践高等女学校(現大阪市立扇町高等学校)、清水谷高等女学校(現府立清水谷高等学校)、十三高等女学校(現府立山本高等学校)、樟蔭高等女学校(現樟蔭高等学校)、静徳高等女学校、宣眞高等女学校(現関西福祉大学金光藤蔭高等学校)、(岸和田) 泉南高等女学校(現府立和泉高等学校)、相愛女学校(現相愛高等学校)、天王寺(高等)女学校(現四天王寺高等学校)、梅花高等女学校(現梅花高等学校)、プール女学院(現プール学院高等学校)、三島実科高等女学校(現府立春日丘高等学校)、湯浅高等女学校、夕陽丘高等女学校(現府立夕陽丘高等学校)
兵庫県	尼ヶ崎高等女学校・尼ヶ崎実科高等女学校(現尼崎市立尼崎高等学校)、淡路高等女学校(現県立洲本高等学校)、伊丹女学校(現兵庫県立伊丹高等学校)、神戸高等女学校(現県立神戸高等学校)、神戸女学院、神戸野田高等女学校、親和女学校(現親和女子高等学校)、豊岡高等女学校(現県立豊岡高等学校)、西宮(高等)女学校(現西宮市立西宮高等学校)、氷上郡高等女学校(現県立柏原高等学校)、姫路高等女学校(現県立姫路東高等学校)
奈良県	県立高等女学校(現奈良女子大学附属中等教育学校)、御所高等女学校(現県立青翔高等学校)、五條高等女学校(現県立五條高等学校)、櫻井高等女学校(現県立桜井高等学校)、高田高等女学校(現県立高田高等学校)、吉野高等女学校(現県立大淀高等学校)
和歌山県	県立高等女学校、新宮高等女学校(現県立新宮高等学校)

3. プール学院におけるピアノの様々な使用例

本章では、三木楽器がピアノを納入した女学校のうち、同じ関西圏に位置し、音楽についての記録資料を多く保存する学校の1つ、普溜女学校(現プール学院、以下、プール学院と記す)に焦点をあて、同校の戦前のピアノの使用例を示す。

プール学院は永生(女)学校(1879-)を前身に1890年に普溜女学校として開校した(プール学院資料室・資料室委員会(編)2000:9)。この年の生徒募集の広告には、オルガンを50銭でピアノを1円で課外教授する旨が記されている(資料室委員会・記念誌編集委員会(編)1990:20)。このことから、開校当時、同校には既にピアノが備えられていたことがわかる。このピアノは、普溜女学校の前身である永生(女)学校から使用されていた可能性も考えられる。また、第2章でとりあげた三木楽器の『ピアノ納入簿』には、1931年にドイツのフォイリッヒFeurich社製グランド・ピアノ(製造番号44707)がプール女学院に納入されたことが記録されている(齊藤2015:195)。フォイリッヒは、パリのプレイエルPleyel(1807-)で修業を積んだJulius Gustav Feurich(1821-1900)が1851年にライプツィヒで創業したピアノ製造業者である。

次に、ピアノが音楽科教育や式典などの学校行事で実際に使用されている事例を示す。撮影年は定かではないが、図1に示す音楽の授業風景の記録写真にアップライトピアノを確認できる。

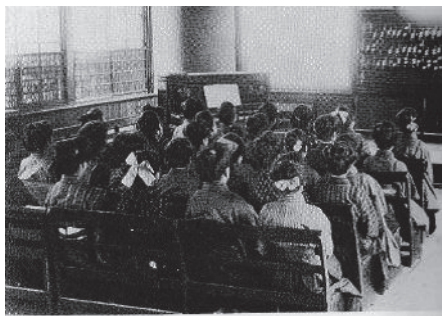


図1 音楽の授業風景（資料室委員会・記念誌編集委員会（編）1990⁶：42）

学校行事の使用例としては、ミッション系のプール学院にとって重要な行事といえるクリスマス・ページェントの記録資料（1926年；1933年；1935年；1938年）が多く残っている（資料室委員会・記念誌編集委員会（編）1990：61；67；81；プール学院資料室・資料室委員会（編）2000：20）。図2に示す1933年の記録写真からは、舞台左手前に写るグランド・ピアノの伴奏が劇の進行を支えていたことがわかる。



図2 クリスマス・ページェント（1933年）の様子（プール 1990：67）

また、1935年に英国出身の外国人教員ベイカー Bakerが帰国する際には、独唱、重唱、合唱、独奏などのプログラム構成による送別音楽会が開かれた（第1部9組、第2部7組）。図3に示すように、ベイカー自身も歌い、ピアノを演奏した。ピアノ独奏としては、生徒が何らかのソナチネを弾き、日本人の教員がショパンFrédéric François Chopin（1810-1849）の作曲した《幻想即興曲 作品66 *Fantasia-Impromptu op.66*》を演奏したことがわかる。この音楽会は、ベイカーのピアノ独奏と校歌斉唱で締めくくられた（プール 1990：91）。



図3 （左端）帰国送別音楽会で歌うベイカー（プール 1990：90-91）

図4に示すのは創立50周年記念式典（1940年）で校長による式辞を傾聴する生徒の様子である。舞台上手下のグランド・ピアノの鍵盤の蓋が開いており、式次第で校長訓辞の前後に位置する国歌斉唱・校歌斉唱の伴奏に用いられたことがわかる。

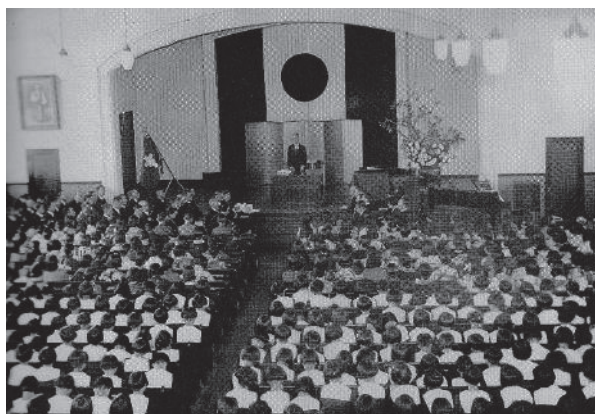


図4 創立50周年記念式典（1940年）で式辞を述べる校長（プール 1990：93）

以上の他に、学習発表会（1940年）では合唱の他に独唱や器楽演奏（資料室（編）2014：124）が、トリストラム校長来朝20年祝賀式（1941年）では余興の1つとして「ピアノ [ピアノ]」（プール 1990：38）が披露された。

プール学院では、毎年開かれる学校行事においても記念式典においてもピアノを含む演奏がとり入れられているわけであるが、音楽科教育の成果が学外に公表される場もあった。たとえば、1938年には大阪音楽協会主催の中等学生音楽コンクールに生徒3名が入賞し（2等、4等、5等）、学内の礼拝でもその演奏が披露された（資料室（編）2014：105）。また、(NHK)大阪中央放送局で開催された卒業記念女学生音楽会（1937年；1939年）にも出演し（資料室（編）2014：93；プール 1990：85）、図5に示すようにグランド・ピアノの伴奏で合唱を披露している。大阪中央放送局には、第2章で述べた三木楽器から計6台のピアノが納入されており⁷、この写真のピアノもその内の1台であると考えられる。



図5 大阪中央放送局の卒業記念女学生音楽会（1939年）に合唱出演（プール 1990：85）

また、1940年には、大阪中等学校研究会音楽部と大阪毎日新聞共催の紀元二千六百年奉祝音楽会に出演している（資料室（編）2014：124）。

開校当初からピアノを備え、様々な学校行事でグランド・ピアノを使用したプール学院は、開校から15年を経た1905年、新たなピアノを購入する目的で、生徒の製作物やカード、玩具を販売する慈善市を開いた（プール学院資料室・資料室委員会（編）2000：11）。ピアノ自体も、慈善事業やさらなる学校運営のために用いられることもあった。たとえば1921年には、中央公会堂で大音楽会を開催して募金活動を行っている（資料室（編）2014：76）。この音楽会では11種のプログラムに2回のピアノ独奏が生まれ、楽界社の音楽雑誌『音楽界』で告知もされた（大阪音楽大学音楽文化研究所（編）1968：418）。また、1935年には室戸台風（1934年）で被害を受けた校舎の復興建築資金の募金のために朝日会館で原智恵子嬢ピアノ独奏会を開催している⁸（プール学院資料室・資料室委員会（編）2000：18）。中央公会堂も朝日会館も大阪市内中心部にある文化施設で、映画の上映や演劇の上演、音楽会の開催などに使用されていた。プール学院は、原智恵子によるコンサートの翌年、校舎と講

堂、礼拝堂の落成にこぎ着けた（プール 1990：80-81）。寄宿舎を改装することによって完成したプール学院の礼拝堂は清心館と名付けられ、修養の目的に使用する講堂としても登録された（プール学院資料室・資料室委員会（編）2000：19）。清心館にはグランド・ピアノが備えられ（図6）、礼拝の他に学習発表会音楽会（1940年）などの行事に使用されている（資料室（編）2014：124）。

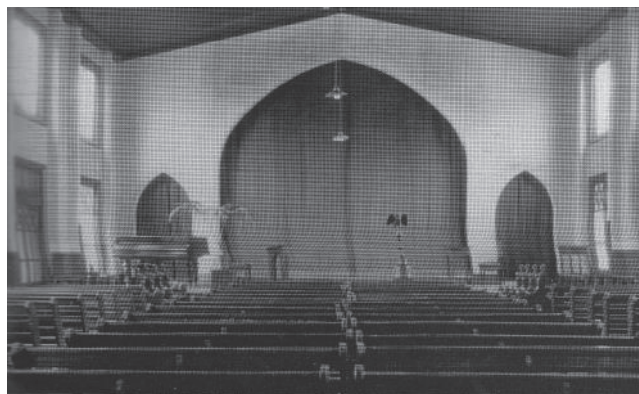


図6 清心館のグランド・ピアノ（プール 1990：75）

プール学院の新校舎を設計したのはヴォーリズ建築事務所である。ヴォーリズ建築事務所は、米国YMCAを通じて滋賀県立商業学校（現滋賀県立近江八幡商業高等学校）英語科教員として1905年来日したウィリアム・メレル・ヴォーリズWilliam Merrell Vories（1880-1964）が1910年に建築設計を手がけるヴォーリズ合名会社（1944年、近江兄弟社に改名）として興した近江兄弟社グループの一部門である。プール学院の他に関西学院や明治学院、同志社大学、神戸女学院、東洋英和女学院などの校舎も手がけている。近江兄弟社には米国製のピアノやオルガンを導入・販売する部門があり、同社は清友園（1922年に開園した幼稚園、現在のヴォーリズ学園附属幼稚園）などの教育活動も行ってきた。学生の頃からアメリカで所属する教会のオルガンを弾き、図7に示すように来日後も近江兄弟社の事務所でピアノを弾いていたヴォーリズの自伝には、音楽が原動力となり、休養と回復と活力との源泉であることが記されている（一柳2014：12-13）⁹。



図7 事務所で秘書の高木の伴奏をするヴォーリズ（ヴォーリズ 1933：102-103頁間）

4. ミッション系女学校におけるピアノの様々な役割

本稿では、まず、大阪の楽器商三木楽器の史料をもとに日本の（高等）女学校へのピアノの納入状況を示した。教科用図書を販売するなど旧文部省との関係も築いていた三木楽器は、関西圏を中心とする日本国内主要都市の国公立の女学校やミッション系女学校にピアノを納入している。

本論文の核となる第3章では、三木楽器がピアノを納入し、同社と同じ大阪市内にあるミッション系の女学校プール学院を事例とし、学内外でのピアノの使用例を示した。プール学院では、開校当初より希望者にピアノの課外教授が行われていた。また、音楽科教育に限らず、クリスマス・ページェントや記念式典など同校の様々な行事の進行をグランド・ピアノが支えてきたことが学校史などの記録資料から明らかとなった。生徒がコンクールに出場し、入賞を果たすなど、その成果は学外でも発揮されていた。ピアノは、慈善活動や学校再建のために用いられることもあった。そして、学校が再建される際には、オルガンやピアノを弾くことのできるヴォーリズにその設計が依頼された。音楽会を催さずとも折にふれて音楽が鳴り響いていたプール学院の音楽学習の成果は、朝日会館や中央公会堂、(NHK)大阪中央放送局など関西の洋楽普及に貢献した他の施設においても披露される機会があり、地域の洋楽文化とも関わりがあった。洋楽受容初期から女学校でピアノが教育にとり入れられていたことは既往研究でも明らかにされてきているが、式典での具体的な使用例や学校再建へのピアノの使用など、教育現場でのピアノの役割として新たにみえてきた事柄もある。プール学院が学内外でこうした取り組みを行えた背景には三木楽器と音楽の嗜みのあったヴォーリズの存在も欠かせない。三木楽器もヴォーリズも20世紀前半の日本のピアノの普及に重要な役割を果たした。たとえば、三木楽器がピアノを納入した大阪のミッション系女学校のなかには、梅花女学校¹⁰のようにプール学院と同様、慈善音楽会を開催しているところもある（大阪音楽大学音楽文化研究所（編）1968：92；102-103；130；137）。

プール学院は音楽家や音楽科教員の育成を主たる目的とする音楽学校ではないが、20世紀前半の関西圏にピアノを広める1つの支えとなっていた。James Parakilasは、編纂した『Piano Roles [ピアノの諸用法]』の序文で、ピアノの文化史とは、著しく順応性のあるピアノが演奏会と日常という互いに対立する社会的状況（場）を媒介し、互いを育み合う機能を果たしてきたことを扱うものであると説いている（PARAKILAS 2002：4）。明治後期の地方のピアノ教育について音楽雑誌をもとに述べた市川も、ピアノが社会教育と学校教育の両面をつなぐ1つの役割を果たしたこと（市川 1999：66）、教育の場に導入されたピアノが演奏者と聴衆の双方に教育的影響を及ぼしていたこと（市川 1999：76）に言及している。筆者は、今後は生涯教育におけるピアノにも目を向け、ピアノを所有しているか否か、ピアノを弾けるか否かを問わず、コンサートホールとは異なる日常の空間に置かれた1台のピアノから発せられるピアノに対する知見の広まりを調査し、ピアノ文化史に奥行きをもたらしていくことを計画している。

謝辞

本研究は、JSPS科研費 JP16K16717（「日本の洋楽受容史におけるアメリカの影響——ヴォーリズ建築にみるピアノの普及——」）の助成を受けている。プール学院資料室の松岡興二氏をはじめ、調査にご協力いただいた関係諸氏にこの場をおかりして謝意を表す。

引用文献

- 一柳、米来留 2014 『失敗者の自叙伝』（初版1970）第三版、近江八幡：近江兄弟社。
 市川、理恵 1995 「明治期における教育の場へのピアノ導入」『人間研究』31：25-31。
 ——1999 「明治後期におけるピアノ教育の地方普及についての研究」『地方教育史研究』20：63-82。
 増井、敬二（編）1980 『データ・音楽・にっぽん』東京：民主音楽協会民主音楽資料館。
 大阪音楽大学音楽文化研究所（編）1968 『大阪音楽文化史資料（明治・大正編）』大阪音楽大学。
 プール学院資料室・資料室編集委員会（編）2000 『年表で見るプール学院の120年』大阪：プール学院。

- 齊藤, 紀子 2011 「河内屋佐助の楽器部創設について:『三木楽器』成立小史」『お茶の水音楽論集』13:60-65.
——2015 『日本におけるピアノの普及に関する研究:三木楽器の帳簿(1902-1940)の分析にもとづいて』お茶の水女子大学博士学位論文、
博甲第144号(人文科学)、iv:207.
- 坂本, 麻実子 1998 「明治末期の地方ピアノ界とプロテスタント系女学校」『桐朋学園大学研究紀要』24:27-44.
——2001 「マーチを弾く女学生たち:近代日本ピアノ界の女子アマチュアの考察」『桐朋学園大学研究紀要』27:37-53.
- 資料室(編) 2014 『プール学院資料集(1)』大阪:プール学院.
- 資料室委員会・記念誌編集委員会(編) 1990 『写真で見るプール学院の110年』大阪:プール学院.
- 武石, みどり 2009 「明治初期のピアノ:文部省購入楽器の資料と現存状況」『研究紀要』33:1-21.
- ヴォーリズ, ウキリアム・メレル 1933 『若き音楽家の一生:高木五郎傳』滋賀:近江兄弟社圖書出版部.
- PARAKILAS, James (ed.) 2002 *Piano roles: A New History of the Piano*, Yale University Press.

註

- 1 たとえば、音楽雑誌『音楽界』(1908-)の「地方楽況」欄では、各地の学校へのピアノの納入や、新しく備えられたピアノで開催された演奏会について報告されている。
- 2 たとえば、第2章で後述する三木楽器の『ピアノ納入簿』には、1921年に大阪市の四貫島小学校(1919-)に国産のグランド・ピアノ2号(製造番号不明)が寄贈されたことが記帳されている(齊藤2015:151)。
- 3 三木楽器の沿革について詳しくは拙稿(齊藤2011:2015:9-17)を参照されたい。
- 4 最終的な納入先が判明する中で最も多くみられたのは個人名宛での納入である(1081台)。他に、娯楽施設や放送局、医療機関などにも納入されている。
- 5 その他の地域への納入事例については、齊藤(2015:33-38)を参照されたい。
- 6 以下、引用頻度の高いこの文献については「プール1990」と略記する。
- 7 いずれもドイツのスタインウェイ社製のグランド・ピアノで、B号(1925年)、D号(1928年、1930年、1936年、1937年、1938年)が納入されている(齊藤2015:173;188;193;196;197)。
- 8 この音楽会は正しくは同窓会が主催している。また、梅花学園など近隣のミッション系教育機関も協力した。
- 9 1941年に日本に帰化し、妻満喜子の一柳姓をとり一柳米来留(ひとつやなぎめれる)と名乗った。そのため、自伝の著者姓名が一柳となっている。
- 10 1918年に国産のグランド・ピアノ2号が、1936年にはドイツのフォイリッヒ社製グランド・ピアノが納入されている(齊藤2015:135:196)。